

巻頭言

『APU 言語研究論叢』第5巻はAPU創立20年記念号となります。このような特別な年を記念する論叢ですので、これまでにAPUの言語教育にかかわった教員および現在の教員の研究の歴史を反映するのにふさわしいものです。とりわけ、APU言語教育センターの初代センター長であり、長年『APU 言語研究論叢』の前身『ポリグロシア』の編集委員長でもあった大橋 克洋氏の、学識深い論文を発表できることを光栄に思います。第5巻に掲載する5編の論文は、APUで開講されている言語教育にかかわる教員の研究分野とそこで学べる多数の言語、そしてAPUでの言語教育と研究を特徴づける協働精神を表しています。

大橋克洋氏による最初の論文は現代英語に見られるある内的変化、著者のいう「self-regeneration (自己再生)」は過去からの言語の特徴を映し出していると論じ、歴史言語学の領域で興味深い考察を提示しました。大橋氏はこの言語変化または言語サイクルの豊富な用例を共有し、remaking(更生)とspiral development (段階的発達)という主要概念を軸に論文を展開しています。

Derrick Apple氏と Benjamin Rentler氏の論文は言語教育においてテクノロジーが果たす役割に焦点を当て、LMS (学習管理システム)の使用によって影響される関係者に行った調査結果の報告です。両氏は教育機関によるLMSの選択がどの程度好意的に学生と教員に受けとめられたかを測定するためにTAM (技術受容モデル)調査を行いました。調査結果は、著者が論じている通り、全面的に利用するためには、まずLMS使用者がテクノロジーを受け入れることが必須であり、今後の教育機関での教育の強化に実践的な示唆を与えています。本稿は、Eラーニングの受容とEラーニングを支える技術的ツールを理解するための厳密な方法を提示しているため、LMSの導入を考えている教育機関には興味深いものと思われる。

Anthony Diaz氏の本巻への投稿はAPU言語研究論叢第4巻に投稿された論文の続編となり、学生が書いた作文コーパスの開発に関する予備研究を発展させたものです。APUの日本人英語学習者のコーパスを詳しく調べ、APUの日本人学生の書いた英語がネイティブスピーカーのものとのように異なるか分析し、学生のニーズに合わせたライティング指導を行うためのメソッドを検討しています。

板橋民子氏、桐澤絵里奈氏、高田亮氏、渡辺若菜氏は、学生が地域に出て日本語を学ぶ言語教育プログラムを実施し、参加した学生に対して行った調査結果を報告しています。そのプログラムは、サービス・ラーニングの枠組みを参照してデザインされたもので、その効果を「学業面の強化」「市民性の育成」「自己成長」の3つの観点から分析しています。そのうえで、サービス・ラーニング導入の目的でもあった「市民性の育成」及び「自己成長」をさらに促すために、このプログラムをどのように改善すべきかを具体的に述べており、今後言語教育にサービス・ラーニングを導入する際に有益な情報を提供しています。

最後に、羅華氏は『APU 言語研究論叢』第4巻に投稿した論文の続編として、中級中国語文法におけるもっとも重要な文法項目である「了」に焦点を当てました。著者はAPUで中級中国語を履修する学生の作文を使用したデータ収集方法について述べ、続いて学習者の誤用ケースの仔細な分析を通じて「了」の効果的な教授方法を提示しています。

『APU 言語研究論叢』第5巻に収められた論稿がみなさまのアイデアの源そして実践的な助言となることを願っています。『ポリグロシア』とその後を継いだ『APU 言語研究論叢』に収められた論文数と多岐にわたる領域が示すように、過去20年の間にAPU教員は多くの研究を行ってきました。次の20年も同様に研究が行われれば、今後もAPU言語教育センターの言語教育は成果を上げることと思います。